

「3.11 伝承ロード New Destination プラン」 第2回 三陸沿岸道路エリア活性化検討会

日時：令和4年12月2日（金）14:00～15:30

場所：マリオス 18階 187会議室

次 第

1. 開会

2. 議事

- 1) 前回の議事録
- 2) 主な意見と今後の対応案
- 3) 自治体ヒアリング結果
- 4) 今後のスケジュール
- 5) その他

3. 閉会

- 資料－1：規約と名簿
- 資料－2：前回議事録
- 資料－3：主な意見と対応(案)
- 資料－4：自治体の意見集約
- 資料－5：今後のスケジュール
- 参考資料：前回検討会の新聞記事
3.11 伝承ロードマップ

「3.11 伝承ロード New Destination プラン」
三陸沿岸道路エリア活性化検討会 規約（案）

令和４年７月１３日

（名称）

第１条 この検討会は、三陸沿岸道路エリア活性化検討会（以下「検討会」という。）という。

（目的）

第２条 検討会は、三陸沿岸地域の新たな交流人口創出に向けた未来指向の地域活性化を図るため、観光コンテンツと周遊プログラムを踏まえたツアールートとともに、三陸沿岸道路の利用促進の検討を行うことを目的とする。

（委員）

第３条 検討会の委員は、別紙のとおりとする。

（座長）

第４条 検討会に座長を置く。

２ 座長は、委員の確認によってこれを定める。

３ 座長は、検討会の議長となり、議事の進行に当たる。

４ 座長に事故があるときは、委員のうちから座長が指名する者が、その職務を代理する。

（委員以外の者の出席）

第５条 座長が必要と認めるときは、委員以外の者に対し、検討会に出席してその意見を述べ又は説明を行うことを求めることができる。

（会議）

第６条 検討会は、原則公開とする。

２ 検討会の資料及び議事については、公開とする。ただし、座長が必要と認めるときは、その一部を非公開とすることができる。

（雑則）

第７条 この規定に定めるもののほか、検討会の運営に関して必要な事項は、座長が別途定める。

「3.11 伝承ロード New Destination プラン」
三陸沿岸道路エリア活性化検討会 名簿

	氏名	役職	所属
1	阿部 憲子	専務取締役 女将	南三陸ホテル観洋
2	阿部 寿一	専務理事	(一財) VISIT はちのへ
3	石井 扶佐子	業務執行理事 駅長	(一社) 思惟の風 道の駅たのはた
4	伊藤 加奈	道路計画第二課長	東北地方整備局道路部
5	太田代 剛	編集局次長兼記事審査部長兼論説委員会委員	岩手日報社
6	奥村 誠 (座長)	教授	東北大学災害科学国際研究所
7	小嶋 淳一	参事兼課長	宮城県復興・危機管理部 復興支援・伝承課
8	紺野 純一	理事長	(一社) 東北観光推進機構
9	澤田 彰弘	総括課長	岩手県復興防災部 復興推進課
10	田中 秀樹	課長	青森県県土整備部 都市計画課
11	平澤 光昭	専務執行役員	岩手県北自動車株式会社
12	藤澤 修	副館長兼総務課長	東日本大震災津波伝承館
13	村上 晃史	支部長	(一社) 日本旅行業協会 東北支部
14	安野 賢吾	編集局次長兼防災・教育室長	河北新報社
15	脇田 淳	営業部長	宮城交通株式会社

五十音順・敬称略

「3.11 伝承ロード New Destination プラン」 第 1 回 三陸沿岸道路エリア活性化検討会

日時：令和 4 年 7 月 13 日（水）14 時 00 分～
会場：フォレスト仙台 2 階「第 10 会議室」

議事録（意見交換内容）

- 南三陸ホテル観洋 阿部委員
 - ・コロナで人流が停止した。
 - ・修学旅行・教育旅行としての来訪は OK。海外から国内に回帰しており、学習として県内沿岸部に来ている。
 - ・沿岸部の指導者（先生）が震災のことを理解していないのが課題。
 - ・移動は便利になったが、空洞化しないようにしたい。
 - ・ハーフ IC の案内が重要と考えている。
- （一財）VISIT はちのへ 阿部委員
 - ・八戸は世界遺産や国宝もあり、歴史的な地域。みちのく潮風トレイルの起点・終点でもある。
 - ・震災復興としては、他県と比べ被害が小さかったが、一緒に進めていきたい。
- 道の駅「たのはた」 石井委員
 - ・道の駅「たのはた」は R3.4 にリニューアルした。三陸道を降りる必要があり道の駅の経営としては厳しい。
 - ・遠くから来る客もおり、今後どう変化するか期待している。
 - ・生活は困ることなく便利になった。通過が増えないか不安ではある。
- 整備局道路計画第二課 伊藤課長
 - ・三沿道開通後、大型車を中心に増加。企業・工場立地が進んでいる。
 - ・休憩施設もあり、休憩施設を目的としている来訪者もいる。
 - ・H30 年から「道・絆プロジェクト」というプロジェクトを立ち上げ、復興道路及び復興支援道路を活用した広域的な連携交流を目的とする事業の支援を行っている。
 - ・近年この事業が増えて来ている。道路が繋がることで更なる横のつながり強化を期待している。
- 岩手日報社 太田代委員
 - ・震災から 11 年が経ち、コンテンツが変わってきている。今後新たなコンテンツが必要。
 - ・取材を通して心に響くストーリーが鍵となると感じた。生の声を聞くことができたり、体験出来たりすると良い。（出来ている所と出来ていない所がある）
 - ・震災経験者が少なくなっているため、指導者が学べる場所・機会があると良い。
- （一社）東北観光推進機構 紺野委員

- ・新たなモデルルートを作るというよりは、デジタルを活用して提供することが必要。10 エリアでは多くて難しい。現事業計画では今後続かない。
- ・三陸エリアは沖縄・広島・長崎のような教育地域になる。これをマーケット(旅行会社・学校等)にどのように提供するかが重要。語り部の育成が必要。
- ・地域によって被害状況、復興のプロセスが異なる。それらを拾い上げ三沿道に結び付けてマーケットに提供することで誘客につながる。
- ・趣旨は素晴らしいので道路を基軸として再度協議し、将来的な誘客・直近の話題性につなげていくことが賢明。

●岩手県復興防災部 復興推進課 澤田課長

- ・このような取組は、県等でも既に取り組んでおり、最終的な目標・成果を「旅行事業者によるツアー造成・商品化・実施」とする取組を行っていかないと二番煎じで終わってしまう。
- ・こうした点を踏まえた場合、エリア住民向けのニーズ調査はどこに反映されるのか？
- ・モニターツアーは、旅行事業者向けのものも必要。
- ・情報発信は外部向けに行うべきであり、内向きの活性化フォーラムを行う必要はあるのか。

●青森県県土整備部 都市計画課 田中課長

- ・ツアーにはオリジナリティが必要。
- ・三沿道主軸＋地域特性・特徴(道の駅等)を最大限活かしたツアーが必要。

●岩手県北自動車株式会社 平澤委員

- ・久慈・八戸線は 8 月～12 月まで実証実験を継続。高田～仙台は現在運行していない。
- ・国内企業の研修用に観光プログラムを作った。毎年 1,000 人くらいいたが現在は 500 人程度。
- ・モデルルートではなく目的志向で。「危機管理ならここ」という具合に目的を絞ったコンテンツが必要。民間事業だけでは先細り。機構なら官民を結び付けられると思う。
- ・三陸の宿泊施設は決まったところしかないため、団体の周遊ツアーは内容がほとんど変わっていない。
- ・当社は地域と連携して新しいツアーを行っている。JR はいち早く着地型の旅行プランの開発を行ったが、大手旅行会社は儲からないからやらない。地元の旅行会社が旅行プランを作って大手旅行会社に提供するような仕組みがあっても良い。その取組を通じて三陸の旅行の仕組みを変えても良いのでは。
- ・高速バス(宮古・気仙沼・仙台線)は平日 8 人、土日 12 人ほどの乗客がいたが、現在 5 人ほどしかいない。ドライバーの勤務体系が厳しくなる中、道の駅が IC から 5 分では厳しい。本線の休憩施設が必要。

●河北新報社 安野委員

- ・本事業の目的を明確に。
- ・自治体ごとに観光客の戻りにバラツキがあり、戻りが少ない自治体にも光をあててほしい。
- ・報道の仕方によって注目され方も異なる。
- ・観光客が利用しやすいアウトプットが必要で、具体的なものである必要はない。

●宮城交通株式会社 脇田委員

- ・高速バスの乗客はコロナの影響で約 4 割減。高速バスで市内の赤字路線を支えていた。
- ・コスト高騰等により補助をもらっているが厳しい。安全を十分に確保しつつ効率化を図る対策を行っている。(運転手 2 人体制→休憩を多く取る等の工夫を行い 1 人体制へ)

- ・観光バスは修学旅行・遠足等はだいぶ客足が戻ってきた印象。一方で団体旅行が皆無に近い状況。東北はもともと少ないがインバウンドも減少。
- ・今後は更なる業務効率化を図りつつ、デジタル化、MaaS の取組等も取り入れていきたい。

●事務局

- ・先ほど各開発対象エリアの考え方がわかりにくいとの指摘があった。三沿道は非常に長いルートなため、全体で見るとぼやけてしまう。わかりやすくするため 10 エリアにわけた。
- ・ルートのあり方、考え方に関しては現在模索中。

●(一社)東北観光推進機構 紺野委員

- ・現状のマーケットをしっかりと把握する必要がある。
- ・教育旅行の誘致が極めて重要なポイント。語り部・ガイドの育成、エージェン特に対する素材の提供に特化すべき。

●東北大学災害科学国際研究所 奥村教授

- ・何を伝承するのか。3.11 は古くなっていくが、その経験を学ぶことには意味はある。学びはそこで生まれる。
- ・コンテンツとストーリーは別。ストーリーが極めて大事。
- ・一度で理解する必要はなく、何度も行きたくなるような奥深さが必要。
- ・「気仙沼大島大橋の上から一望する」というコンテンツはどうか。

●南三陸ホテル観洋 阿部委員

- ・語り部も時間とともに語る内容が変化していく。力のある語り部の伝承をしていきたい。

●(一財)VISIT はちのへ 阿部委員

- ・三沿道開通で時短になり、八戸からの移動も南にだいぶ進んだ。
- ・陸前高田の伝承施設も広島の様になれるのでは。
- ・八戸でも教育旅行を行いたい。きっかけ作りになれば良い。

●道の駅たのはた 石井委員

- ・震災がきっかけで田野畑にきた。移住して 5 年になるが、震災が形骸化されつつある。
- ・「何を伝えていくか」が大事。

●整備局道路計画第二課 伊藤課長

- ・デジタル化が情報発信として重要。
- ・行ってみたいと思ってもらえる繋がり方がないと良い。

●岩手日報社 太田代委員

- ・震災を経験していない先生が生徒に伝えるのは難しい。事前に生徒に向けた情報コンテンツが必要。
- ・教育旅行の場合は現場の先生の意見を聞いても良いのではないかと。

●(一社)東北観光推進機構 紺野委員

- ・気仙沼でブルーツーリズムの動きあり。情報を繋げるツールとして道路が重要。
- ・3.11 伝承ロード機構として地元の動き、イベントをピックアップしてつなぎ合わせる必要がある。

- 岩手県復興防災部 復興推進課 澤田課長
 - ・現在県の総合計画第二期アクションプランを策定中。三沿道は重要な位置づけとされている。
 - ・この検討会での議事内容を取り入れて行きたい。


- 青森県県土整備部 都市計画課 田中課長
 - ・未来への持続可能な取り組みが重要。

- 岩手県北自動車株式会社 平澤委員
 - ・事業として3年計画だが、ランディングページを先に立ち上げた方が良い。

- 河北新報社 安野委員
 - ・事前学習等でも現地の人とリモートで繋ぎ、直接話を聞くと良いのでは？
 - ・略称は「三沿道」？「三陸道」？一般の人がわかる表現が欲しい。

- 宮城交通株式会社 脇田委員
 - ・青森→宮城・岩手の視点も入れて議論してほしい。

第1回目の検討会 主な意見と今後の対応案

	主な意見	今後の対応案
1	<p>ツアールートの考え方</p> <ul style="list-style-type: none"> ・震災から11年が経ち、コンテンツが変わってきている。心に響くストーリーが鍵となる。生の声を聞くことや体験出来たりすると良い。そのような新たなコンテンツが必要。震災経験者が少なくなっているため、指導者が学べる場所・機会があると良い。 ・地域によって被害状況、復興のプロセスが異なる。それらを拾い上げ三沿道に結び付けてマーケットに提供することで誘客につながる。 ・最終的な目標・成果を「旅行事業者によるツアー造成・商品化・実施」とする取組を行っていかないと二番煎じで終わってしまう。 ・モデルルートではなく目的志向で。「危機管理ならここ」という具合に目的を絞ったコンテンツが必要。 ・何を伝承するのか。3.11は古くなっていくが、その経験を学ぶことには意味はある。コンテンツとストーリーは別。ストーリーが極めて大事。 ・一度で理解する必要はなく、何度も行きたくなるような奥深さが必要。 ・観光客が利用しやすいアウトプットが必要で具体的なものである必要はない。 	<p>今後の対応案</p> <ul style="list-style-type: none"> ・施設間を巡るツアールートの設定については、旅行事業者の考え方にゆだねる。  <ul style="list-style-type: none"> ・三陸沿岸特有のストーリーを体現できるテーマ性のあるコンテンツ間を巡る考え方を示す。 (ex.震災遺構や伝承施設の特性と既存施設との整理)
2	<p>教育旅行について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・修学旅行や教育旅行として学習の一環として県内沿岸部に来ている。 ・三陸エリアは沖縄・広島・長崎のような教育地域になる。これをマーケット(旅行会社・学校等)にどのように提供するかが重要。 ・教育旅行の誘致が極めて重要なポイント。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教育旅行は、リピーターの確保に繋がるため、今後も動向を把握し、マーケットに提供する。

3	その他	<ul style="list-style-type: none">・地元の旅行会社が旅行プランを作って大手旅行会社に提供するような仕組みがあっても良い。・三沿道主軸＋地域特性・特徴(道の駅等)を最大限活かしたツアーが必要。	<ul style="list-style-type: none">・地域の特性を活かすような考え方を示す。
---	-----	---	--

自治体ヒアリング結果

【観光動向について】

【石巻エリア】

- ・野蒜海岸海水浴場が12年ぶりにオープン、「おしか家族旅行村オートキャンプ場」も賑わっており土日の予約は困難になっている。
- ・北上川河口が整備され商業施設も出来たので、近くの石ノ森漫画館と併せて観光拠点にしたい。
- ・「おしか家族旅行村オートキャンプ場」の利用者は増えているようだ。

【登米エリア】

- ・南三陸町には旧南三陸町防災庁舎など震災遺構や伝承施設がオープンし、海水浴場などもある。登米市の東側には山と河、西側には水田が広がり、農業が盛んでグリーンツーリズムに適し、農泊・民泊が可能であることから、連携することによってさまざまな学びやアクティビティが可能になるメリットがある。

【南三陸エリア】

- ・震災伝承施設「南三陸311メモリアル」がゲートウェイとなって、南三陸各地にある観光コンテンツに繋いでいくように考えている。

【気仙沼エリア】

- ・お帰りモネ効果もあって2千人/日程度の来客もあって宿泊客も増えたが、より滞在時間を増やす工夫が求められている。そのためにも、観光と復興を絡めた取り組みを進めたい。
- ・海の市2階に設置したモネ展(R3.7.22~R4.10.30)では、来館者数10万人を超えた。
- ・観光戦略を推進するため「気仙沼観光推進機構」を組織しており、令和4年に引き続き令和5年度も震災をテーマにしている。
- ・岩手県との県際連携研究会があり、周遊観光を検討している。

【大船渡エリア】

- ・基石海岸キャンプ場がコロナ禍にあって賑わいを見せている。今年からフルオープン(冬場も含めて)と聞いている。
- ・高田松原伝承館の教育旅行が盛んだが、陸前高田市内には宿泊施設が少ないので、そこをゲートウェイとして大船渡や気仙沼へ向かうことになっているが、大船渡温泉をはじめできる限り岩手県側で受け入れるように考えている。
- ・三陸道の開通と相まって宮城県際連携としてドライブマップやデジタルスタンプラリー、トレイルスタンプラリーなども始まっている。
- ・基石海岸のキャンプ場の利用者が増えている。

【釜石エリア】

- ・月毎のイベントの実施効果もある。今後は雪の少ない地域特性を生かして、道の駅で冬場でも力を入れてイベントを企画していくことにしている。また、潮風トレイルでは冬場は落葉し一層見晴らしがよくなるなどを景観の良さを強調しながら体験ツアーなどを誘導していく。

【宮古エリア】

- ・遊覧船「うみねこ丸」の乗船客数は想定内の乗員だが、冬場の運行も行いリピーターの確保に努める。
- ・田野畑村の明戸キャンプ場は賑わっている。
- ・三陸鉄道普代駅を改修・増築し、昨年9月に道の駅「青の国ふだい」として登録。

【八戸エリア】

- ・コロナ禍の中にあって令和2年からマイクロツーリズムの促進の観点から地域コンテンツのプロモーション活動を行っている。三蜜回避観点からキャンプ場の紹介を、動画はビジット八戸のHPを活用し発信するとともに、雑誌への掲載を行っている。
- ・三陸沿岸国立公園協会と三陸ジオパークの2団体では三陸道の開通を契機とした利用促進を図る動きが見られる。

【開通効果について】

【石巻エリア】

- ・石巻市河北町にある道の駅「上品の郷」が「じゃらん道の駅グランプリ 2022」で全国 2 位の満足度評価になった。要因は車中泊の評価が高かったとのこと。
これも三陸道が延伸され車中泊する利用者が増えた効果と思っている。

【登米エリア】

- ・道の駅「三滝堂」の立ち寄り台数が三陸道の供用が北進するとともに増加している。
三滝堂の近くにある「ふれあい公園」には BBQ やキャンプ場が仙台ナンバーの車で賑わっている。
近くに日本そば屋もオープンした効果もある。

【気仙沼エリア】

- ・仙台市から気仙沼市に2時間弱で来られるようになった。
一方で、これまでは宿泊する来訪者が多かったが、日帰りが多くなり市内での滞在時間が短い。
- ・大船渡市や南三陸町に水揚げされた魚が気仙沼市に運び込まれるなど、漁業関連の加工施設や物流施設が集積している。
- ・気仙沼市への来訪者は今年のGW では令和 2 年に比べ1.2倍と増えている。
また、コロナ禍にあつて青森県のナンバーも多かった。

【陸前高田エリア】

- ・仙台圏からの観光入り込み客数が増えており、観光入込客数が三陸沿岸部では宮古市について2位となった。

【大船渡エリア】

- ・県内の観光客だけでなく仙台圏からの客が増えている。市内の宿泊施設の宿泊者数も増加している。

【釜石エリア】

- ・釜石港のコンテナ取扱量はガントリークレーンの整備以降、年々増え続けており、今ではコロナ前まで戻っている。

【久慈エリア】

- ・八戸-久慈間の交通量は増大している。
- ・県都盛岡への経路は、以前は国道 281 号経由だったが、三陸道開通後は宮古経由復興支援道路利用が多くなっている。
- ・久慈の運送業者は、仙台以南において東北道でなく三陸道利用に切り替わりつつある。
- ・洋野町の宿泊施設では宿泊割か三陸道か分からないが宿泊客は戻りつつある。

【八戸エリア】

- ・青森県八戸地区、岩手県久慈地区・岩手県二戸地区で組織する連邦会議が頻繁に開催。
- ・県を跨いだスタンプラリーの連携事業が行われている。
- ・コロナ禍の影響が少なかった GW では三陸道の交通量が多く感じた。

【震災伝承について】

【石巻エリア】

- ・石巻圏DMOでは、南浜津波復興祈念公園や震災遺構(大川小学校、門脇小学校)を巡る教育旅行にも取り組んでいる。
- ・関東圏の私立学校がフィールドワーク実施のため訪れるようになった。

【南三陸町エリア】

- ・関東、東北の教育旅行としても旧防災庁舎やさんさん商店街が利用されている。

【気仙沼エリア】

- ・学生の修学旅行として、震災伝承施設のある南三陸町や気仙沼市に訪れることが多くなっている。

【陸前高田エリア】

- ・高田松原津波復興記念公園、東日本大震災津波伝承館、道の駅、が目的地となっており、受け入れ時間の延長など受け入れ体制を強化していく。
- ・教育旅行も多くパークガイドの利用が昨年6千人で、今年は1万人以上を目標に行っている。

【釜石エリア】

- ・県内学校の修学旅行先として釜石の「いのちをつなぐ未来館」の来場者が増えている。既にオープン以来10万人を超えている。

【宮古エリア】

- ・田老地区にはたろう観光ホテル、防潮堤など震災遺構が多くあり、「学ぶ防災ガイド」を中心に防災学習の拠点化を図っていく。また、明治・昭和・チリ地震と津波に襲われているがそれらを含めた津波資料館計画があり、田老を津波防災学習のフィールド化を考えている。
- ・県外からの修学旅行や、県内陸部からの教育旅行が増えている。

【久慈エリア】

- ・「もぐらんぴあ」では震災展示もあって、教育旅行が盛んだ。
- ・野田村では、震災で大きな被災を受けて、大学からのボランティアを多く受け入れたことから、復興を研究テーマとしてフィールドワークする大学が多く来訪している。(10大学程度)しかも継続して来訪している。

【その他】

【石巻エリア】

- ・東松島市では令和 6 年の開業に向け矢本 PA の道の駅化を進めており、三陸道の休憩施設の少なさが整備を誘導している。（矢本 IC 周辺に産業施設用地として空地があるが東松島市で企業誘致を進めている模様。）

【宮古エリア】

- ・令和5年度に山田 IC 付近に「道の駅 やまだ」を移設する予定。
- ・普代村では、昨年のふるさと納税額は3億円で、人口一人当たりに換算すると県内でも突出した納税額である。

【参考：意見交換で出た観光施設等】

石巻エリア	<p>〈石巻市〉道の駅「上品の郷」、おしか家族旅行村オートキャンプ場、石ノ森漫画館、日和公園、サン・ファン・バウティスタパーク、金華山、田代島、網地島、渡波海水浴場、白浜海水浴場、網地白浜水浴場、十八成浜、南浜津波復興祈念公園、震災遺構（大川小、門脇小）</p> <p>〈女川町〉出島</p>
登米エリア	道の駅「三滝堂」、三滝堂ふれあい公園、明治村、長沼公園
南三陸エリア	道の駅「さんさん南三陸」、震災復興祈念公園
気仙沼エリア	道の駅「大谷海岸」、海水浴場（大谷海岸、お伊勢浜、小泉海岸、小田の浜）
陸前高田エリア	道の駅「高田松原」、高田松原津波復興記念公園、東日本大震災津波伝承館
大船渡エリア	道の駅「さんりく」、碁石海岸キャンプ場、おおふなとポート（観光交流センター）
釜石エリア	<p>〈釜石市〉いのちをつなぐ未来館</p> <p>〈大槌町〉浪板海岸、蓬莱島</p>
宮古エリア	<p>〈宮古市〉かっこ道の駅「みやこ」、道の駅「田老」、浄土ヶ浜、宮古CC、田老観光ホテル、田老防潮堤</p> <p>〈山田町〉道の駅「やまだ」、オランダ島</p> <p>〈岩泉町〉龍泉洞、ふれあいランド</p> <p>〈田野畑村〉道の駅「たのはた」、北山崎、サツパ船遊覧、明戸キャンプ場</p> <p>〈普代村〉道の駅「青の国ふだい」、黒崎園地、黒崎灯台</p>
久慈エリア	<p>〈久慈市〉道の駅「くじ」、道の駅「いわて北三陸」（建設中）、もぐらんぴあ、小袖海岸、琥珀博物館、山根温泉べっぴんの湯</p> <p>〈洋野町〉道の駅「おおの」、大野キャンパス、ウニーク（水産会館）</p> <p>〈野田村〉道の駅「のだ」</p>
八戸エリア	<p>〈八戸市〉蕪島、種差海岸、八戸港朝市</p> <p>〈階上町〉道の駅「はしかみ」、階上岳、ハマの駅「あるでい〜ば」</p>

今後のスケジュール

令和4年7月13日 第1回検討会
(規約、地域現況 他)

同 12月2日 第2回検討会
(三陸沿岸自治体関係者 意見交換)

令和5年4月中旬 第3回検討会
(コンテンツ検討、周遊プログラム)

同 7月下旬 第4回検討会
(ニーズ調査、モニターツアー案)

同 10月中旬 第5回検討会
(モニターツアーアンケート結果)

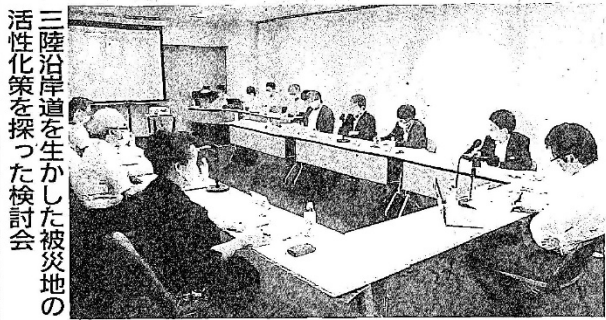
震災伝承ロード 観光と融合探る

推進機構、仙台で検討会

東日本大震災の伝承施設のネットワーク化などに取り組む一般財団法人「3・11伝承ロード推進機構」(仙台市)は13日、被災地を縦断する三陸沿岸道沿いの地域活性化に向けた検討会を設立した。伝承施設と観光資源を融合させた周遊の仕組みづくりにつなげる。

会議は青森、岩手、宮城3県の観光や交通、伝承の各関係者や県担当者ら15人で構成。仙台市内であった初会合では、インターチェンジから車で20分以内に案内員や語り部を置く伝承施設が32あり、防災学習の拠点として定着している現状などを確認した。

委員からは「旅行者に刺さるコンテンツを観光事業者向けに発信すべきだ」と



三陸沿岸道を生かした被災地の活性化策を探った検討会

いった提案も出た。検討会は来年秋まで周遊の在り方についての議論を重ねる。

閉会后、座長に就いた東北大災害科学国際研究所の奥村誠教授(地域計画・交通計画)は「三陸道により気軽に伝承施設を回れるようになり、地域での学びの

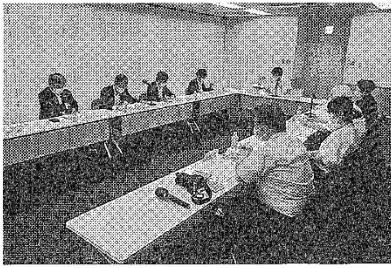
可能性は格段に広がった。あまり知られていない奥深方も考えたい」と語った。

三陸道エリア活性化検討会が初会合 23年度にルート提案へ 3.11伝承ロード推進機構

東北

東北支社

T 98000802 仙台市青葉区二丁目13の18ステーションプラザビル
電話0222・2222・42222 FAX0222・2222・71333
tohoku@deca.n.co.jp



検討会は同機構が国土計画協会の支援を得て本年度

3・11伝承ロード推進機構(代表理事・今村文彦東北大学災害科学国際研究所所長)が主催する「三陸沿岸道路エリア活性化検討会」(座長▽奥村誠東北大災害科学国際研究所教授)の初会合が13日に仙台市青葉区のフォレスト仙台で開かれた。写真。高速道路「三陸沿岸道路」(三陸道、仙台市▽青森県八戸市、延長359キロ)沿線の観光や交通、行政の関係者が出席。三陸沿岸地域の新たな交流人口の創出に向け東日本大震災の伝承施設などを活用した付加価値のあるツアープログラムを検討する。

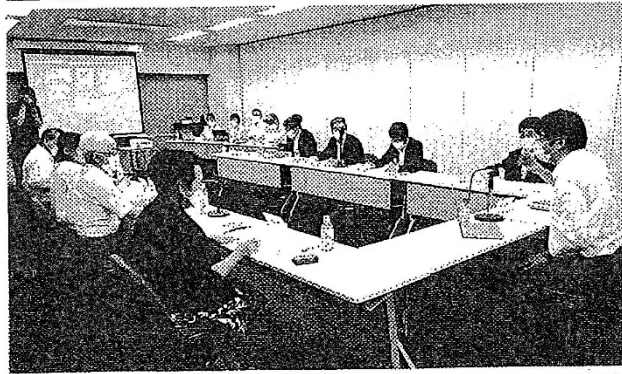
「震災を経験していない指導者に勉強の機会を提供する必要がある」「沖繩や広島、長崎の平和学習のよう」に各地域の観光素材に重点を置くべきだ」といった意見が出た。同事業では三陸沿岸の新たな観光ルート開発に向け、持続可能な事業環境を構築しながら▽新たな周遊ルート開発可能性調査▽モニターツアーの実施▽三陸道・周辺エリアの魅力を伝える情報発信の三つを実施する。三陸道の移動効率や快適性だけでなく、震災遺構や伝承施設を活用し観光と融合したハイブリッドなプログラムを目指す。行政の防災設備、復興インフラの内部、早期に再開した工場見学などが組み込まれ

た施設見学も模索する。事業計画によると、本年度の第3四半期(10～12月)に現地視察、第4四半期(23年1～3月)に関係者との意見交換会やニーズ調査(アンケート)を計画している。23年度第2四半期(7～9月)からモニターツアーを開催。24年度に三陸道を活用した地域交流の在り方を旅行事業者と地元関係者が話し合う活性化フォーラムも開く。三陸道は東北3県(青森、岩手、宮城)の太平洋沿いを結ぶ高規格道路で21年に全線供用を開始した。開通により、仙台▽八戸間の所要時間は約3.5時間短縮。地域産業の振興や迅速かつ安定的な救急搬送などを後押しするストック効果が期待されている。沿線には288の震災伝承施設(21年7月時点)がある。

ツアープログラムで 三陸の交流を活性化

伝承ロード推進機構
検討会が初会合

3・11伝承ロード推進機構（今村文彦代表理事）は、仙台市内で三陸沿岸道路エリア活性化検討会（座長・奥村誠東北大災害科学国際研究所教授）の初会合を開いた。写真。三陸沿岸道路を活用して観光コンテンツと震災伝承施設を融合させ、三陸沿岸地域の交



流入人口活性化を推進するツアープログラムを開発する。今後、現地視察や地域関係者と

の意見交換を経て、2023年3月にルート案をまとめ、7月にモニターツアーを実施し、10月にも周遊モデルを固めて情報発信する予定。

この日は、東北地方の旅行・観光事業者や学識者らで構成するメンバーが、開発対象エリア案を始め、検討スケジュールや三陸沿岸道路・地域の特性などを確認した。

現段階の開発対象は▽宮城県石巻市▽同登米市▽同南三陸町▽同気仙沼市▽岩手県陸前高田市▽同大船渡市▽同釜石市・上閉伊郡▽同宮古市・下閉伊郡▽同久慈市・九戸郡

▽青森県八戸市・階上町の10エリアを想定している。

復興道路として2021年12月に全線開通した三陸沿岸道路(三陸道)を活用し、周辺エリアの活性化を目指す議論が本格的に始まった。東日本大震災の伝承施設のネットワーク化などに産学官民で取り組む一般財団法人「3・11伝承ロード推進機構」は7月、検討会の初会合を開いた。来年秋をめぐり、各伝承施設や地域の周遊のあり方などについて報告をまとめる。

同機構は国土計画協会が募集する「高速道路利用・観光・地域連携推進プラン」に選ばれ、「3・11伝承ロード New Destination プラン」を展開する。青森県八戸市から仙台市まで全長359キロの高規格道路を活用して、各地の観光コンテンツと伝承施設を融合させ、地域に新たな交流人口を生み出すことを目指している。

沿道には300を超えてる震災伝承施設があり、

東北

3・11「伝承ロード」どう活用

推進機構の検討会

10月1日には宮城県南三陸町に「南三陸3・11メモリアル」がオープンする。三陸の豊かな自然や食を含め、地域を訪れる人にとり提案していくかが問われる。

機構のまとめたデータによると三陸道の全面開通により、仙台港北インターチェンジ(IC)ー八戸南IC間の所要時間は2010年時点と22年1月末の比較で約3・5時間短縮。渋滞などに必要な時間のばらつきも教授は「災害はいろんな

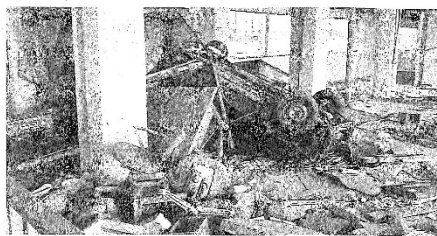
10月1日には宮城県南三陸町に「南三陸3・11メモリアル」がオープンする。三陸の豊かな自然や食を含め、地域を訪れる人にとり提案していくかが問われる。

機構のまとめたデータによると三陸道の全面開通により、仙台港北インターチェンジ(IC)ー八戸南IC間の所要時間は2010年時点と22年1月末の比較で約3・5時間短縮。渋滞などに必要な時間のばらつきも教授は「災害はいろんな

同区間の18年1月末と22年1月末の比較で約52分減少し、交通手段としての信頼性も高い。三陸道は冬の積雪も少なく、ほぼ通年で来訪者の受け入れが可能だ。

機構は当初、代表的なツアールートを提案することを目指していたが、意味からも、バスで代表的な施設を巡る従来の団体ツアーから、自分で行き先や交通手段をどうの体験とともに、三陸の魅力を生かすか、知恵が問われている。(松田拓也)

三陸道周辺の活性化へ議論



宮城県気仙沼市の震災伝承施設では、高校の校舎内に入り込んだ車両など津波の生々しい被害が体感できる(気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館)

震災伝承施設の登録状況

	施設数	うち第3分類(案内員や語り部を置く施設)
青森県内	11	1
岩手県内	120	18
宮城県内	135 (仙台市内22)	28 (同4)
福島県内	42	13
合計	308	60

(注)7月20日時点、宮城県南三陸町の「南三陸311メモリアル」はオープン後に第3分類に登録予定

奥村教授も指摘しているが、三陸道の利用促進という観点では、来訪者の交通手段には自家用車やレンタカーが当然、視野に入ってくる。「この伝承施設はどんな特徴があって、近くにはどんな観光コンテンツがあるか?」「こういうルートで回った場合に、車での所要時間は?」といった具合に、時代に合わせて一歩進んだ情報提供が求められる。一方、次々に完成する伝承施設の間で連携を高め、どう活性化するかという地域で取り組む必要のある課題もある。

東日本大震災から11年が経過し、復興はハード整備から、震災の記憶や経験をどう後世に伝えていくかといったソフト面に移りつつある。コロナ後のライフスタイルの変化も踏まえ、伝承施設などでの体験とともに、三陸の魅力を生かすか、知恵が問われている。(松田拓也)